

『戦後日本人は一体なにであつたのか、なにではなかつたのか』について、あなた自身の判断を煮つめてほしい——むのたけじ

不屈のジャーナリスト・むのたけじが  
遺した、幻の新聞「週刊たいまつ」を  
ついに復刻！

戦後日本の激動を直視しつつ、農村問題、利権政治、  
出稼ぎ、貧困、サークル活動など身近な暮らしに根ざ  
して、秋田県横手の一隅から、日本と世界を射照らし  
た炎、たいまつ。

ジャーナリズム・メディア研究、戦後文化、市民運動  
史を知る生きた資料が、ここにある――。

発行責任者

むのたけじ

週刊

# たいまつ

復刻版

全5巻

●底本 —

『週刊たいまつ』第1号～第780号  
(1948年2月2日付～1978年1月30日付)

発行責任者 むのたけじ・たいまつ新聞社発行

B4判・上製クロス装・総約1,600頁

●体裁 —  
●推薦 —  
●価格 —  
●発行 —  
●本体 —  
●税込 —

門奈直樹(立教大学名誉教授) 小森陽一(東京大学教授)  
本体90,000円+税(各巻18,000円+税)

ISBN 978-4-8350-8267-7

本紙復刻にあたっては、むのたけじ氏より横手市立横手図書館に寄贈された  
資料を元に、同図書館が収集・修正を加えたデジタルデータを使用している。

不二出版



写真提供：武野大策

# 小さな出来事の大きな意味を考える——『週刊たいまつ』復刻への期待

敗戦直後、東京、名古屋、京都、そして大阪などで戦争責任を感じとった新興新聞が誕生した。しかし、戦時中の翼賛体制による新聞の統廃合政策で肥大化した既成新聞は戦後も生き残った。新興紙は既成紙の市場を崩せず、数年後には消えた。

『朝日新聞』を退社して、名古屋の『中京新聞』の創刊に関わったむのたけじは郷里の秋田に帰り、市井のジャーナリストとして再出発した。今度は限られた領域の中でも同時代の事象を記録する個人新聞を発行した。それが一九四八年発刊の『週刊たいまつ』だった。

同紙は題字の脇に「炬火」欄を設けて、温もりのある社会批判を行つた。「夜の終わりに朝が来る」ことを信じ、論争の現場に身をさらした魯迅の影響を受けた欄だった。

むのは地

むのが一躍知れわたったのは、同紙掲載の諸論説や記事が一九六三年、むのの仕事を一時期手伝つた、大野進経営の広告会社・企画通信社から『たいまつ六年』のタイトルで出版され、翌年、理論社から再刊されたことによる。多くの紙誌類が「たつた一人でつくる新聞」「妻と一人で灯した『たいまつ』」「自立者の精神の軌跡」などと評した。高度経済成長期の隙間から時代傾向に抵抗していた全国のミニコミ紙に勇気を与えた。

むのは最晩年、私との雑誌対談で「ジャーナリズムの仕事は人間の生き様の原因、プロセス、結果、さらに結果が新たな原因をつくる、その道筋を示す仕事だ」と述べた。かつて啓蒙思想家ディドロは「ジャーナリズムとは新しい出来事の発見だ」と言つた。二人に共通した姿勢は日常の小さな出来事の大きな意味に気づくことだった。

このついては又哉・非哉・平和の言論人ごとに語らうることが多かつた。大事なことはこれらの言論の背骨となるジャーナリズム思想だ。歴史の彼方に震ふる心を細

推薦します

『週刊たいまつ』というジャーナリズム

むのだけじさんは「反骨のジャーナリスト」と言われることを、強く拒絶していた。なぜなら「反骨はジャーナリズムの基本性質」(『99歳一日一言』岩波新書、二〇一三年)だからだ。なぜこのような形容矛盾が生じるかと言えば、「日本のジャーナリズムが反骨を失つてしまつたからだ」とむのさんは断言する。辞書で調べてみると「反骨」とは、「容易に人に従わない氣骨。権力に抵抗する氣骨」と説明されている。そう言われても、「氣骨」という言葉がわからないと、全体として意味を把握できない。「氣骨」とは、自分自身の「信念に忠実で容易に人の意に屈しない意氣。氣概」。むのさんは、「自分自身の信念に忠実で容易に人の意に屈しない意氣」で「権力に抵抗する」「ジャーナリスト」だったのである。

ジャーナリストは、決定的な局面において、〈それしかない〉言葉を発しなければならない。むのさんは二〇一一年の三・一についてこう表現していた。「かつてない天災がひどい人災と共に襲つてきて、一万五〇〇〇人以上のいのちが奪われてしまつた」(『希望は絶望のど真ん中に』岩波新書、二〇一一年)と。この状況に対する世界の反応については、「日本列島の一隅に発生した出来事と人々の動きが引き金となつて、人々の目ざめが誘発され」「人々の連帯＝人類の友情を開拓する作業が、地上の至る所で始まつた」(同前)とも。

『週刊たいまつ』は、戦争責任を総括できなかつた新聞社を退社したむのさんが、一九四八年に横手市で創刊した地域新聞だ。「たいまつ」は「自分の身を燃やして、この時世に自分たちの朝を生む」（同前）のである。この週刊新聞は、むのさんの思想全体を表現し、現代の市民運動の思想につらなる活字媒体である。

二十九

**小森陽一**  
(東京大学教受)

سیاه و سفید

桐生悠々 主宰  
夕刊新大阪  
〔昭和21年2月1日付〕



不安と希望が入り混じる戦後の大阪に、流星のようにきらめいた「流星号」。『夕刊新大阪』は、大新聞に先駆けて投書欄、学芸欄の充実をばかり、文化新聞としての矜持を示した。武田麟太郎、石川達三、大佛次郎、田村泰次郎の連載小説を次々に连载、左右に長い「横長新聞」と呼ばれて大阪市民に親しまれた本紙だ。

前身誌（名古屋詩書会編著）を含めて復刻・刊行。日本の良心を伝える戦時下ジャーナリズム、近現代史研究資料の決定版である。

- 体裁……A4判・上製函入・総1、490
  - 推薦……家永三郎・井出孫六・太田雅夫・  
　　・揃定価……本体60,000円+税

ISBN 978-4-8350-0527-0

別冊定価…本体1,000円+税

ISBN 978-4-8350-0532-4



本体1 ISBN

敗戦後まもない1946年に発刊、武者小路実篤が巻頭を飾り、好編「たづねびと」を残した太宰治を筆頭に、石坂洋次郎、壱井栄、室生犀星、草野心平らを擁して「文芸復興」を志した『東北文学』。

- 別冊解説（高橋秀太郎）・総目次・総索引  
体裁……A5判・上製・総4・134頁  
推薦……安藤宏・石川巧・澤正宏・山田有策  
掲定価……本体145,000円+税



東北文學 全8卷・別冊1

敗戦後まもない1946年に発刊、武者小路実篤が巻頭を飾り、好編「たづねびと」を残した太宰治を筆頭に、石坂洋次郎、壺井栄、室生犀星、草野心平らを擁して「文芸復興」を志した『東北文学』。

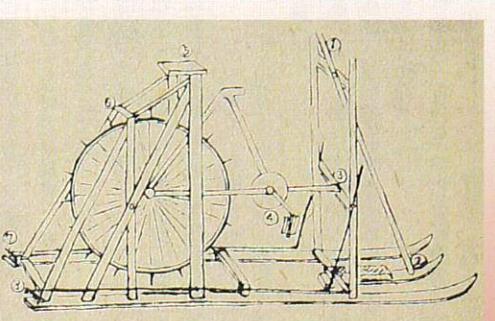
- |     |                   |
|-----|-------------------|
| 別冊  | 解説（高橋秀太郎）・総目次・総索引 |
| 体裁  | A5判・上製・総4・134頁    |
| 推薦  | 安藤宏・石川巧・澤正宏・山田有策  |
| 掲定価 | 本体145,000円+税      |



大宅壯一 主宰

室生犀星 草野心平らを擁して「文芸復興」を志した「東北文学」「新しい文学」を志向した本誌は、東北における戦後文学の原点を、いまも生きしく伝えてやまない。

- 別冊解説（高橋秀太郎）・総目次  
体裁 A5判・上製・総4・1・3  
推薦 安藤宏・石川巧・澤正宏  
掲定価 本体145,000円+税



「たいまつ」は、秋田という風土に根差す記事を積極的に掲載。上は17歳の少年が考案した「雪上自転車」図案。(1950年1月21日付より)

# 東北文学 全8巻・別冊1

門奈直樹  
(立教大學名譽教授)

自分の身を焼いてくらやみを照らす「たいまつ」——そのたいまつに我々のひとり、ひとりがなりたい、そのためにはみんなの血となり肉となる新聞をつくりたい、これが本紙創刊の念願の一端である……

## 復文にあたって

戦後、戦争報道に責任を感じ朝日新聞社を退社、「反省と反戦」を掲げ

左は『週刊たいまつ』創刊号のメッセージ（抜粋）。人々の役に立つ新聞として、「政治ボス共には激しく憎まれる新聞」を目指すとある。この後段には、「原稿募集」「社員採用」が並んでいた。



自分の身を焼いてくらやみを照らす」松明をつくると理想に燃えたむのは、秋田県横手の一隅であつても、つねに世界の動きを意識し、そこから日本を変革していくような新聞づくりを目指した。

「泣く子と地頭に勝て」「ガンヂーさんはなぜ死んだ?」「パンパン根性を焼き捨てよ」といった当時の見出しには、出稼ぎや貧困にあえぐ人々こそが、世界の動きを理解し、「自分らの身辺の小さな事柄とどうつながっているのか、いないのか」を吟味すべきだと考えた、ものの姿勢があらわれているのではないか。

——不二出版編集部

卷二

の関心  
見返り  
裏申さ  
税も豫想され「いまや農村  
景氣は下り坂にはいつた」  
と一般に断定されるに至つ  
てそんと一ぱだらかにまでヤミで  
制御をば制當だつて公定で出で  
よまつわらあとは少しでもヤミで  
の労働流して再生産にそなえよう  
の物とあせるに成る、この  
で動か抜き道あるがゆえに農民  
ともすれば自分たちのす  
の物價によづからじはじめてゐる苦  
を年年にみづきともにみづめる  
ことなせす、年年来の好景氣  
が氣食糧不足といふ國金體  
からられれば悲しむべき事態  
の上に陥へた時の仇花に  
すぎないとをきとらず、  
和田義三えがく  
西尾政局するごとに  
生活信條ごとに  
の心境はいかず  
をまわす

暖気にするな  
ことしになつてから縣内の  
気温は例年よりも相當高く、  
こんな風は豊作のとく、カ  
ンパンなど人々の話はさ  
まざまだが、實際にどんな  
やういふ考へ方で過してを  
るやうに思はれる。しかし  
それだけの考へ方ではすこ  
ぶる無責任である。宇供達  
に草木植物も教科書によ  
く記へてやれないやうな  
餘めな世の中に誰がしづの  
か。みんな自分達である。  
自分達が國の中堅層とし  
て日本本を背負つて立つてゐ  
る間にこの諷刺を抱いたの  
である。過失があつたのか  
否の考へ方に――、ふだん  
つた人達には、ザツとさう  
いふ絶路で敗戦の責任を自  
分達に日生活の計で強く  
感じてもらいたいのである  
時に負けたといふことは人  
平 均 値 は 次 の通りだが、こ  
場所北支場の結果である  
影響があるものか、次は大  
川町等の森林省駕車試験  
車の結果である  
氣象状態が作物に影響す  
るのは、植つけられて  
からもののことだ、冬期  
に氣温が高くて霜が少いと  
いうことがたとえれば稻作  
にどう解くかは學問的に  
はなか／＼見えないこと  
である、従つて現在の天  
候をもつて特別に豐凶を  
豫想することはあらたな  
ことである、たゞ憂に  
ついては等と水が急に  
ふえて低地では必ず立  
ちくさの危険があるが  
實際にはこれもさう心配  
しなくてよいようだ  
二月の天候  
二月の縣内の天候は秋田測  
候所の定期豫報によれば氣  
温は概して平年年なみだが飛  
行の目高で降水量も日照もい  
るのより多くなつておける最  
近五十年の氣温、降水量の  
法意

般に低いのが農村の子供、高いのが低いものも兩通りある。これまでは農村の優等生が青少年の相當部分が都城へ吸収されていたわけだ。そのもの一つは農村の生活が能の發達に有利なこと、これが大遅延に不利なことより現在のわが國の農業は肉體のはなしでいき難いからであるしかも苦しい。別に生産の効果があがらないから農村人が知性をもつてゐるが、むずかしい年がいい年を離れてくる原因もこゝにある。この生活めしかたを改めることの必要があるわけだ。

眞に皆さま自身の新聞とするために

私どもとして単に皆さまに読んで頂くだけでなく、真に皆さまご自身の生活に深く根ざした皆さま自身の新聞にしたい念願です。どんな注文でも、どんな不満でも、どんな相談でも最も気やすくお寄せになつて下さい。およそ日本に新聞というものが生まれて以来、読者と新聞との離れがこんにちほどひどいことはありません。戦争中にはじまつたこの傾向は今なお改まつてはいません。国民の心にとけこんだほんとうに信頼される新聞を私どもは育てたいと存じます。苦しんでいる人や貧乏な人やいつも馬鹿をみてている正直者には愛され懲罰をむさぼる者や政治ボス共には敬へ、憎まれる新聞一週刊「

なものになりたいと思います。  
〔真に皆さま自身の新聞とするために〕一九四八年二月一日付、創刊号より

100

の旧制中学時代の恩師。創刊にあたり、特別に寄稿してくれた。

(1) 第 1 號 週刊

うもいに生きる

ただハツキりしていること  
は我々東北人が無気力な  
見ゆのせまい冬眠狀態をつゝ  
てゆく限りとても植民地  
の立場からぬけだせないと  
いうことだ。立派のいふ  
なくして自立の心に、おれさ  
えよければよいではなく  
みみんながよくなることによ  
つて自分もよくなるとい  
ふの考へ方をもつて  
立つ者はひどいものであ  
もしれない、しかしそう  
事が死ねば秋のみの  
自分の身を勉めら  
るやうを貪る

刊だいまつ第一號  
發行所：秋田縣横手町  
まつしまつ新聞社  
印刷所：秋田市下米町  
紙版社：秋田市中央一丁目  
株式會社

卷之三

たいまつ

たいまつ

「たいまつ」(後  
設けた。むのを  
六年) (1963年)  
轉した。



| 西暦   | 年齢 | 主なできごと  |
|------|----|---|
| 1915 |    | 一月二日、秋田県六郷町（現、美郷町）に農家である父・鉄之助、母・ヲナカの六人きょうだいの次男として生まれる。すぐ上の兄は生後間もなく死亡、実質的には長男として育てられる。 |
| 1921 |    | 六郷小学校入学。  |
| 1927 |    | 秋田県立横手中学校（現、横手高等学校）入学。のちに作家となる石坂洋次郎から、国語・作文と道徳を学ぶ。                                    |

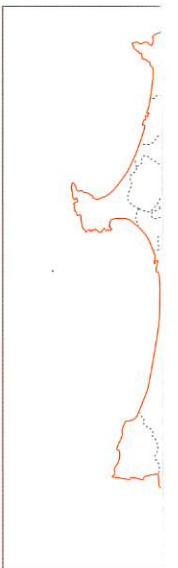


## 『週刊たいまつ』 1948~1950年に見る記事見出し (抜粋)

| 号数    | 発行年月日            | 主な見出し                                   |
|-------|------------------|---|
| 第1号   | 1948(昭和23)年2月2日  | 音なき警鐘は誰のために鳴る／ダルマさん、足を出せ                |
| 第2号   | 2月16日            | 青年は次第に立直る／情けなや！講和を前に嵐の十字路／ガンナーさんはなぜ死んだ？ |
| 第3号   | 2月26日            | 東北よ！百年前の過失を繰り返すな／町長なぐられる                |
| 第4号   | 3月14日            | 泣く子と地頭に勝て                               |
| 第5号   | 3月24日            | パンパン根性を焼き捨てよ／失業保険が失業す／ガラス泥棒も七つ道具        |
| 第8号   | 4月17日            | 幼い肩に時代の責苦／困る男の無理解・女の焼モチ                 |
| 第9号   | 4月24日            | ナメられている素人行政家／農業恐慌と決闘せよ／流れゆく堤防流れてこぬカネ    |
| 第10号  | 5月1日             | 政治的バラバラ事件 恐るべき悪作用／金のあるほど辛い金詰り           |
| 第11号  | 5月8日             | 狭い国土の奪い合い／早くも老いた青年会                     |
| 第12号  | 5月22日            | コドモスクエ／寸土を争う世智辛さ                        |
| 第13号  | 5月29日            | 因習を碎き新しい村つくり                            |
| 第15号  | 6月12日            | 山林王国ガラキマス木がナンボあるか★それさえ判らぬお役所            |
| 第16号  | 6月19日            | 情けない！祖国の有様 気持は収容所にも劣る／30万円がみずアワ         |
| 第17号  | 6月26日            | まだ幼児だけは助かっている／百姓の知を吸う者                  |
| 第23号  | 8月14日            | いつまで馬鹿なんだ 八月十五日の反省／フジヤマ的秋田觀             |
| 第52号  | 1949(昭和24)年3月26日 | ねらわれる長期欠席児 貧者の声「助けてもらってめいわくです」          |
| 第55号  | 4月23日            | むすめたちが・けんがいへ・しゅうしょくしたがりません 効きすぎた人身売買SOS |
| 第57号  | 5月7日             | ひろがる！かくし田を出せ運動 農民の気持は段々に変わってきた          |
| 第62号  | 6月11日            | コドモの萬びきの解剖〈座談会〉                         |
| 第71号  | 8月20日            | 「愛情三角形」の真相／私は暴力に屈した女はやっぱり「弱い者」か         |
| 第73号  | 9月3日             | 横手あきんど自己解剖                              |
| 第123号 | 1950(昭和25)年9月30日 | 憲法「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して我らの安全と生存を保つ」     |
| 第125号 | 10月14日           | 日本の再武装は是か非か                             |

芽は冬に耐えて伸びる力を蓄えた。耐えて力を養なつものには春にめぐりあつても春を知らない。

■『週刊たいまつ』は創刊後「炬火」と改称され、一躍有名にした単行本『たまつ』として収録、



■『週刊たいまつ』の題字は2回にわたって変更されている。左端が創刊当時のもの、次が1948年9月25日付以降、上が1951年10月20日付以降に使用された。



■『週刊たいまつ』は、1948年9月25日付で、新しく「たいまつ」連載開始。後に「たいまつ」が第七八〇号で休刊。1949年4月、「たいまつ」が理論社から再版。ベストセラーに。テレビドキュメンタリー「はいはいこちらたいまつ新聞」(TBS)放送。1950年9月、「たいまつ」は三省堂新書、刊行。1951年10月20日付で「たいまつ」が横手市立横手図書館で電子化が完成。合計二回に及んだ、「むのたけじ平和塾」がはじまる。

■『週刊たいまつ』は、1948年9月25日付で、新しく「たいまつ」連載開始。後に「たいまつ」が第七八〇号で休刊。1949年4月、「たいまつ」が理



# 週刊たいまつ

むのたけじ 発行責任者

## 『週刊たいまつ』とは

『週刊たいまつ』は、終戦を期に朝日新聞を退社したもののたけじが秋田県に帰郷、主幹として横手市で創刊した週刊新聞である。1948年2月2日に、タブロイド判2頁、1部3円で創刊。発行部数は2,000部だった。「農業問題、ボス退治…アジア情勢の解説に力を入れ、青年団体や文化サークルとの接触につとめた」という。1978年の第780号をもって休刊。むのはその後、積極的な講演、著述活動を通じて反戦を訴え、2016年に101歳で亡くなるまで、不屈のジャーナリストとして活躍した。

| 卷数  | 原本号数        | 発行年月日                    | ISBN(978-4) | 定価              |
|-----|-------------|--------------------------|-------------|-----------------|
| 第1巻 | 第一号～第一三五号   | 一九四八年一月一日～<br>五〇年二月二三日   | 8350-8268-4 |                 |
| 第2巻 | 第一三六号～第二七一号 | 一九五一年一月一日～<br>五三年一二月一九日  | 8350-8269-1 |                 |
| 第3巻 | 第二七二号～第四四五号 | 一九五四年一月一日～<br>五七年一二月二十五日 | 8350-8270-7 |                 |
| 第4巻 | 第四五六号～第六〇九号 | 一九五八年一月一日～<br>六一年二月二〇日   | 8350-8271-4 |                 |
| 第5巻 | 第六一〇号～第七八〇号 | 一九六二年一月一日～<br>七八年一月三〇日   | 8350-8272-1 |                 |
|     |             |                          |             | 本体18,000円<br>+税 |

底  
本  
——  
週刊たいまつ 第1号～第780号  
(1943年2月2日付)

〔週刊たいまつ〕第1号～第780号  
（1948年2月2日付）～（1978年1月30日付）

むのたけじ 発行責任者

大きな国際的事件でも自分らの身辺の小さな事柄などどうつながつていいのか、いかないか、自分らの中の小さいと見える出来事がどんな時代的意義をもち、国全体あるいは世界全体の問題とどうつながっているのか、いかないか、こうした吟味が必要である――。

（『たいまつ十六年』より）

A color photograph of an elderly man with long, thin, white hair and a deeply wrinkled face. He is wearing a dark blue pinstripe suit jacket over a light blue striped shirt and a red tie. He is seated in a chair, holding a dark wooden cane in his left hand and a black microphone in his right hand, which is resting near his mouth as if he is speaking or singing. The background is slightly blurred, showing what appears to be an outdoor setting with greenery and possibly a building.

死ぬ時が  
生活のてへん

不二出版

〒111-2005  
東京都文京区水道2-10-10  
TEL 03-599816704  
FAX 03-599816705  
00160-2-94084

表示価格はすべて税別